

「関西学院」の命名とその音声

池田 信

はじめに

本論文のⅠでは、創設者たちによって「関西」がその戦略構想のなかの主要構成要素の一つとして位置づけられ、それが「学院」に冠されて本学の名称となり、同時に 'Kwansei Gakuin' 'クワンセイガクイン' という呼称となる過程を追っている。

そのⅡでは、当時の国際的、国内的、歴史的環境からクワンがどのように多様な音声環境をもち、またどのようにそれらに対応したかを推定している。

そのⅢでは関西学院の呼称をカナ文字による字音水準のものに留まらず、さらにIPA(国際音声記号)を用いて音声水準にまで進んでとらえ、その旋律的特徴をも示している。

そのⅣでは、全国的に「クワン」に対する「カン」の優勢がさらに強まるなかで後者を字音の正書法とするなどの政策提言が強まり、その動向が戦後の国語改革をもたらした過程に触れ、さらに関西学院の呼称に及ぼした影響に言及する。

最後に関西学院の伝統的呼称「クワンセイガクイン」と現代的呼称「カンセイガクイン」との双方の関係を学院史の内に然るべく位置づける必要を論じている。

合拗音としてのクワンは当初はクワンと表記されており、関西学院創立のときもそうであった。後に拗音であることを明確に示すためにクワンと表記されるようになった。本稿では煩雑さを避けるために原則としてクワンで通して記述するが、必要に応じてクワン、ないしクワン(クワン)と表記する。

I 「関西学院」の命名

1. 関西学院の設立に向けて

W.R.ランバスの日本伝道構想と実践

中国（清国）伝道に主力を注いできたアメリカ合衆国の南メソヂスト監督教会（Methodist Episcopal Church, South. 以後 M.E.C.S. と略記）は、1885年に新たに日本伝道に取り組むことを決め、日本宣教部（Japan Mission）を設置した。その総理（Superintendent）に任命されたのが32歳の若きW.R.ランバス（Lambuth, 1854-1951. 以後、総理ランバスあるいは息ランバスと呼ぶ）であった。彼は一足先に来日した父 J.W.ランバス（以後、父ランバス）らを追って1886年11月に神戸に着き、本格的な活動を開始した。その当初に打ち出したのは、関西を当面の活動区域とし、その中枢を神戸に置くという方針であった。まずその文書を示しておく。

「基本方針遂行の中枢として私たちはとりわけ神戸に着目しています。

1. そこは私たちが適正と考える領域の中央にあります。メソヂスト監督教会（Methodist Episcopal Church. 本論文では以後M.E.C.と略記。上記 M.E.C.S. はここから分離した組織）は私たちから北方に向かっては200マイルまでの、南方に向かっては300マイルまでの地域を占めています。
2. そこはいま完成を急いでいる鉄道路線の中心です。
3. そこは四季をつうじて日本のどこよりも健康に適した海港都市です。
4. そこは瀬戸内海を制しており、沿岸を行き交う船舶はここを発着所としています。
5. ここは条約港（日米修好通商条約にもとづいて居留地が設置された港湾地域）なのでアメリカ、中国、イギリスとのほぼ毎週の交信のさいには、内陸部では保証されていない利点があります。この条約港の外（居留地の外）では、現地の会社によって教育要員に任用されている場合を除いては、改正条約の発効に到るまでは私たちには居住する権利さえもが拒まれていのです。
6. 小高い山並みと南面の山麓にひとと寄り添い、下れば大阪湾沿岸に到り、

厳寒の冬と炎熱の夏が支配する長い海岸線の両極のほぼ中間に位置し、見晴らしのきく景観と、道幅が広いと評判の街路とがあります。25万の人はすでに神戸に住まいがあり、またその他の人たちが、私たちと同様に、ここに成功の足がかりをえようと熱望しているとは、なんと驚くべきことではありませんか」。

1887年の文書。日本宣教部記録。Pinson.W.W.,*Walter Russel Lambuth*, 1924, 所収。再録『関西学院百年史 資料編Ⅰ』641-642頁。翻訳と小字注記は本論文の筆者による。

この文書は南メソヂスト監督教会の日本伝道の拠点として神戸に着目していると明言し、その理由を上記の数点にわたって挙げている。それらを四点にまとめて説明を加えておきたい。

その第1点は、M.E.C.S. 日本宣教部の活動領域の問題である。この組織よりも13年前から宣教を開始していた M.E.C.日本宣教部がすでに東方では東京・横浜、さらに弘前・函館などにおいて、西方では長崎において宣教の実績をあげているということを前提にして、宣教においてこの教派との対立を招かないようにそれぞれの活動領域を定めようとした。

当時日本で宣教活動をしている上記2教会の他にカナダメソヂスト教会 (Methodist Church, Canada) があり、この3者で合同の道を探求している状況にあったので、これらの組織の間で問題となる諸事項について2者あるいは3者で協議する道は開かれていたようである。二つのメソヂスト監督教会はなんらかの形で活動領域について協議し、上記引用文中の1で見たような合意に達したと考えられる。

M.E.C.S. は1888年7月の大会で他の国内メソヂスト教会との合同を期待する決議をしている。また1889年8月23日の3者共同委員会において「合同基準」についての文書がまとめられている。ランバス総理の上掲文書は1887年のものとされているが、合同の努力はそのとき既に始まっていたと考えられる。(Minutes of the ANNUAL MEETING of THE JAPAN MISSION of the Methodist Episcopal Church. Third Session, 1889. pp.21-22. 以後は Minutes と略記。なおこの動きは1907年の合同組織＝日本メソヂスト教会の成立に到る)

ここでM.E.C.S.が確保した自らの活動領域は、以前から活動を開始していたメソジスト諸派の宣教空白地を対象としたが、具体的には彼らが本部をおいている場所（神戸居留地）から「北方に向かって200マイル、南方に向かって300マイルまでの地域」であり、神戸をその中枢としている。

ところで北に200マイル、南に300マイルというこの命題が意味をもつのは、神戸を中心に見て日本列島が南北に延びている場合だけである。そこでそれを文字通りに解釈すれば、神戸から北に200マイル、南に300マイルというところは日本海や太平洋へと大きく突き抜けることになる。しかし実際には彼らが当初自らの領域にしようと考えた神奈川県から佐賀県までの地域（この点については後述）に限定してみれば、南北でなく概して東西に延びており、そうすると神戸から東に200マイル、西に300マイルとするのが妥当であると考えられる。総理ランバスの錯覚は、日本国全体の地図上の位置づけからみて、日本は北東－南西あるいは北北東－南南西といえるぐらいの傾斜を示していると不確かに記憶していて、それをそのままこの限定された地域にあてはめてしまったことによるものであろう。この地域に限定していえば、むしろ東西に延びているといえる。

宣教範囲をどこに考えるかは重要な問題であるので、この点のいっそうの検討はさらに後におこなう。

第2点は、同地を主要連結点の一つとする陸路、海路の交通手段が急速に発達していることを指摘している。神戸を出発・終着駅とする国鉄東海道本線がまさに全線開通しようとしていたし、西へは私鉄が路線を延長しつつあり、やがてはその国有化を通して国鉄山陽本線が開通する。

神戸港は横浜港と並ぶ国際港として開発整備され、海外諸国との人と貨物の交通を拡大させつつあったが、同時に国内、特に瀬戸内海沿岸諸港との交通も発展させた。先に述べた広い領域への布教活動にはこれらの交通手段は欠かせないものであった。神戸は国際港湾都市として開発されつつあったが、さらに造船業、鉄鋼業などを擁する臨海工業都市へと成長していくことになる。神戸に着眼したのはまさしく総理ランバスの慧眼であった。

第3点は、当時前掲の条約によって関係外国人の居住、事務所などの設置、外国の団体との交信などは原則的には居留地に限られていたので、この条約が改正され居留地が廃されて外国人やその団体の日本国内での居住や活動が認められる1899年までは神戸居留地を拠点とするほかなかったことである。

第4点は、神戸の自然的、社会的環境の良好さをうたったものであった。

ランバスらはこのような政治地理学的な観点から戦略を打ち立てたうえで宣教活動に専念したのであるが、総理ランバスの在日在任4年間の活動とその成果をみると、そこにはめざましいものがあった。この点については、下記の神田教授の綿密な調査・研究に基づく報告を参照していただくことにして、ここではもっぱら照準を関西学院の呼称に合わせて進めていくことにする。

神田健次「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」第13回関西学院歴史サロン、2004年11月18日、『関西学院史紀要』第11号、2005年3月。

神戸に男子校を設立する

宣教活動には伝道と教会設立が基本となっているが、その成果を確実なものにするためには聖書教育のほか学問的教育をも行う学校の設立が必要である点を特に強調するのが、メソヂスト派の戦略の特徴であった。関西学院創設に貢献した二代目院長の吉岡美国は、後に設立当時を振り返って講演で次のように語っている。

「最初から学校を設け、青年を教育することが希望されていました。(中略)老若にたいして説教をなし、聖書を説き、精神の導きをなすとともに、日本の精神界を導くためにはこれから育って一人前の日本人となる青年に円満な教育を授けることが大切で、これがなくては天にいます父上を十分に知る道が開けないという深い強い考えでこられまして、最初から学校を建てることを昼も夜も忘れられなかったのであります。」

吉岡美国「ランバス先生のことども」『新星』1937年10月30日、19頁。

なお旧式漢字、旧仮名遣いに慣れない読者が理解しやすいように原文を現代日本文の様式に換えている。また文意を整えるために句読点の打ち方を変更した。しかし内容には一切手を加えていない。以後も同じ。

ランバスらの学校設立の意思、意欲はこのように強力であった。その決意の強さは、次の文章によく示されている。

「決議：日本のメソヂズム二派の組織統一が実現されるまでは、私たちの独自活動に求められているものは、教育担当者を神戸に結集させて教育事業の全部門をこの地で行なうことであり、さらに当面の取り組みとしては、Kwansei Gakuin において徹底した聖書教育を行うための教授陣と諸施設とを提供する迅速な措置をとることであり、さらにまたM.E.C.日本宣教部書記に知らせるように総理にこれらの活動について報告することである。」

総理ランバスの宣教部あて報告書、*Minutes*, 1890年26頁、『資料編 I』624頁。

合同をも検討しつつある対抗組織 M.E.C. への配慮がここにもうかがえる。

関係者の熱心な取り組みによって事態は学校設立に向けて進行していく。

2. 「ランバスー吉岡協議」と「関西」

「明治二十二年（1889年）の夏、九月よりの開校をひかえて私とランバス先生と二人で学校の名前を考えたものでしたが、当時は相談したり協議したりする人もなく二人きりで考えたのでした。」（吉岡美国「関西学院の名の由来」『関西学院新聞』1935年7月20日号）

名称・呼称選定の過程はこのランバスー吉岡協議から始まっている。この協議は非公式なものであり、公式の記録はないので、前掲の吉岡談話のほかいくつかの回顧談を手がかりにしてその内容を推定することにする。

「ランバス先生は……支那や日本が古典的な名をとうとぶことを知ってお

られたので……弘道などという名も考えてみましたが……もっと平易なのがよかろうと考え……近畿から西の青年を養成しそれから広く及ぼすという考えを含め……当時関東にたいし関西といわれていた関西をとって関西学院と名づけたのであります。」(上掲記事)。

ここでは「関西」が強く意識されているが、この意識は総理ランバスが来日当初に示した宣教戦略構想の一つとしての宣教範囲のうちに伏線をうかがうことができる。先に指摘したように「北に向かって200マイル、南に向かって300マイルの地域」という表現では意味をなさないので、これを「東に向かって200マイル、西に向かって300マイル」と読み替えれば俄然意味は明瞭となる。

この場合東に向かって200マイルは現在の静岡県富士市あたりになる。すでにプロテスタント系、特にM.E.C.などメソジスト系教会の活動が積極的になされていた神奈川県、東京府などの箱根山以東は境界争いを避けて区域外とし、箱根山以西、より具体的には神奈川県と静岡県との県境以西に自らの活動領域を求めたものと推定される。西に向かって300マイルは現在の佐賀県西方の唐津市あたりになる。これは佐賀県と長崎県の県境を意識した数値であると考えられる。いずれにせよ、M.E.C.が活動領域としていた長崎県は領域外となる。

領域を確定するのに県境を使えば、正確で分かりやすいものとなる。おそらく東は静岡県まで西は佐賀県までというのが、M.E.C.との話し合いの妥結条件であろう。ところでこの妥結条件を米国本部に知らせるには、県名では理解されにくく、マイル数で示すことが必要であったと思われる。

以上の考察から判断すれば、神戸から「東に向かって」200マイル、西に向かって300マイル」とするのが、実態に適合した説明であるといえよう。

吉岡は後にこの問題を次のように回想している。

「まず南メソヂスト教会の伝道すべき地域、もちろん全国にたいして伝道

することを希望はしますが、他教派との関係もありますし、まだどの教派からも布教の手がさし伸ばされていない教勢上の未開の地として、京都一詳しくいえば、大津のあたり一から西、山陽山陰四国、九州の東半が、まだ伝道が行き渡っていなかったのを、これを伝道地と定め、神戸を中心として、伝道を始めました。」前掲誌19頁。

この回想によれば、神戸からもっとも東寄りの伝道地は琵琶湖巡回区（1886年12月設置決定、資料編 I, 640頁）であり、大津がその中枢であった。神戸から大津までの直線距離は44マイル弱であり、当初の構想の200マイルには遠く及ばなかった。このときの M.E.C.S.日本宣教部の実力では遠く静岡県まで活動の手を伸ばすことは、構想としてはあったとしても実現するのは困難であった。総理ランバスの上掲の文章は、まさに取り組みを始めようとした時点でその構想を語ったものである。一方、吉岡の講演はその四十数年後の1937年に行われており、初期の活動を顧みたらうえでの言説であったといえよう。

総理ランバスが1887年に宣教の管轄範囲に設定したのがおよそ箱根の関以西あたりであり、ある時期にはそれは関西と呼ばれる地方であった。また1886年の大晦日に日本宣教部がその設置を決めた琵琶湖巡回区の中心は大津であり（総理ランバス前掲報告書, *Minutes*, p.24. 資料編 I 640頁）、また実際に宣教を及ぼし得たところも大津であった。大津にごく近い逢坂の関の西方にあたるところは、ある時期にはまた関西と呼ばれる地方であった。

『学研 新漢和大字典』「関西（カン〔クワン〕セイ）」の項によれば、日本では「平安時代は、逢坂おうさかの関より西の地方。江戸時代以降、箱根の関より西の地方」を意味したとされる。

諸橋轍次『大漢和辞典』（12315頁、巻11、1959年）の「関西」の項によれば、中国では函谷関以西の地、日本では近江の国逢坂山以西の地方、また箱根山以西の地とされている。

これらの事実はおそらく吉岡ら日本人協力者との会話を通して総理ランバスにも伝わっていたと思われる。ここで親子二代にわたって中国宣教に従事し、漢籍にもよく通じていたとされる彼が直ちに想起したのが中国のかつて

の代表的な関所、函谷関であったに違いない。ここはかつて隋・唐の時代に時期を違えて中国全土に首都として君臨した長安と洛陽との間の関所であり、東西の諸軍が攻防を重ね、多くの故事の生まれたところであった。そしてこの関所から西方が「関西」と呼ばれた。

後年、吉岡が専門部文学部英文科での講義「国民道德論」において述べたところでは、総理ランバスは彼に「関西は中国語でクワンセイと発音するんだよ」と語っていたそうである（当時の受講者山本善偉・元教員の回想）。総理ランバスが中国（清国）ではすでに公用語とされていた北京語の *guanxi*（ピンイン表記）、*kuansi*（前掲「大字典」での表記）ではなく、また日本においてはすでに慣用的な発音となっていたカンサイでもなく、隋唐時代の主に長安地方の発音であり日本の漢音の原音でもあったクワンセイのほうを選んだことは、これこそが「関西」の古典的な音声であると判断したことによるものであろう。

一方、吉岡の方であるが、「関西」をこれから設立する学校の名称の冒頭に据えること、またそれをクワンセイと読むことにまったく異存はなかったと思われる。南メソヂスト監督教会の宣教活動、新しい学校の設立に総理ランバスを助けて尽力した吉岡は、「関西」にこめたランバスの深い想いを知り、それに共鳴したことであろう。

吉岡はまた次のように語っている。

「明治初年以來漢字は呉音で読まず漢音で読む習慣ができて、呉音で呼んでいたものも漢音で読むようになり関西と書けば青年の間ではカンセイと読むのが普通でありました。

当時は字さへ見れば漢音で読むことになっておってひどいのは東京を「トウケイ」と読んだものでした。」（前掲、吉岡美国「関西学院の名の由来」）

なおこの記事は吉岡が関西をクワンセイでなくカンセイと読んだように書いているが、談話から記事へのこのような転記の仕方は、吉岡の音声を忠実に再現するものではない。乞うご参照、池田信「関西学院の呼称について」『関西学院史紀要』第16号、2010年3月。

吉岡は後にさらに次のように語っている。

「関西をカンサイと呉音で呼ばないわけは、命名当時のいわゆる新進学徒は、諸事革新的な気風から、東京をトウケイと読むように、漢音でばかり読む傾向があったので、学院の名も、クワンセイと漢音で呼んだのであった……。」（前掲、吉岡美国「ランバス先生のことども」24頁）

なお付言すれば、関西を呉音で読めばクエンサイとなる。

大日本帝国憲法（1889年公布）により新たに出発する日本国をどのようにして発展させるか、またそのために中国に代わって新たに欧米先進諸国から大量に移入しつつあった思想、文化、科学、経済などをどのように受け入れるかの論議を通して新進学徒たちの意気は高揚したが、彼らはまた漢音を正音として再生させることでその先進性を顕示しようとした。吉岡もまたそのような「諸事革新的な気風」を抱いていたのであった。

M.E.C.S.日本宣教部の領域、活動範囲として与えられた聖なる地が歴史的には「関西」と表される地域であり、その中枢神戸に創設されようとしている学校の名称にはこの「関西」を冠すること、またその呼称は慣用化されている音声カンサイでなく、古典的呼称であるクワンセイとなったことを考えれば、命名に際しての「関西－クワンセイ」の発想は生まるべくして生まれたものといえよう。

3. 「学院」を選んだ理由

続く問題は「学院」である。学院の読み方については「関西」の場合とは明らかに扱いが違う。関西を管轄地、神戸を根拠地とし、そこに総力を結集して宣教師養成とアカデミー教育のための学校を設立するというランバスらの当初の戦略に照応するように「関西」の読みを古典的な響きを帯びたKwansei・クワンセイへと彫琢したのに比べて、「学院」の読みにたいしては「学」は呉音、「院」は慣用音（漢音、呉音、唐音のいずれにも分別困難なもの）というように一貫性がないにもかかわらず、ランバス、吉岡らは、そのことにはなんら注意を払わなかった。「関西」の場合と同様に漢音で統一するならば、カクエ（エ）ンとなるはずであるが、この点では彼らにとっては、当

時日本で慣用化していたガクインという発音で足りていたのである。

発音はともかくとしてこの語を採用したのには理由がある。初等教育から高等教育にいたる諸段階の教育制度や諸種の専門的教育制度を包摂できる総合的学校組織を目指すうえで、その意図を学校名において明示する必要があったと考えられる。宗教理念を根底に置く総合的学校組織はキリスト教系学校の多くが目標としたところであり、これらの学校の多くは「学院」の表記を採用している。そうしなければ小学校、中学校、高等学校、大学などのように個別段階の教育制度に特化した国公立学校との違いを明示できないからである。

キリスト教を理念とする教育機関にたいしては、当時政府・文部省は抑制的な態度で臨んだ。これに対抗する見地からも総合教育機関を標榜する「学院」という言葉が進んで採用されたといえよう。

キリスト教系学校で学院という表記を最初に採用したのは、明治学院である。これは1887年に既存の系列三校、すなわち東京一致神学校、一致英和学校、神田英和予備校を統合して組織した学校であり、それぞれ明治学院の邦語神学部、普通学部本科、普通学部予科となった。

その名称は理事植村正久の提案によるもので、彼の言によれば「明けき政治の学問の学校」であり、その意は「明治の時代における学問の殿堂」であって明治学院は「明治文化の中に輝くキリスト教教育の代表的学園」であったという（鷲山第三郎『明治学院五十年史』1927年、75-76頁）。設立の理念の中では「学問の殿堂」として意識されていたのである。「院」には「周囲を高い垣で囲まれた大きな建築物」という意味があり（『スーパー大辞林』電子辞書版）、新設のキリスト教系「学院」は、その名によって現状というよりは未来に向けての志の大きさを示したものといえよう。

ちなみに吉岡は日本のミッションスクールのうちで学院という表記を採用したのは関西学院がもっとも早いように述べているが、関西学院の命名は1889年であり、1887年命名の明治学院よりも2年遅い。正しくはそれを採用したもっとも早い学校グループの一つというべきであろう。

青山学院は1894年に東京英和学校の後身として発足し、神学部と普通部

(高等普通学部・英語師範科・予備学部)とを設けた。さらに1927年には東京英和女学校の後身である青山女学院を合併している(『青山学院120年』1996年、付表)。

関西学院は既存の系列学校の再編成という段階をたどらないで1889年に神学部と普通学部を新設して発足した。この神学部は認可されないままでの出発であった。しかし総合的学校組織へと成長させようという目標については明治学院、青山学院と共通の目標をもっており、以後はそうように成長していくこととなる。

「関西」と「学院」とを別個に考察してきたが、ともあれ「関西学院」という名称は整った。ところでこの名称を正式に決めるのは、創設者であるM.E.C.S.日本宣教部の年会総会である。1889年7月の年会では組織担当の委員会が関西学院憲法案(この憲法は英語のconstitutionの和訳語であり、現在では法人、準法人などに関するものについては寄付行為、定款などと呼ばれている)を作成しそのなかに関西学院の名称を織りこんでいたが、そのすぐ後の日程では総会開催は不可能とされ、決定は先送りとなった。

しかし同年9月には知事宛に関西学院設立願いを提出し、同月に許可を得て、翌10月から授業を開始した。学院憲法に載せた関西学院という名称はなおM.E.C.S.日本宣教部で可決されてはいなかったが、同年7月の年会においてはその名称への反対論は見当らず(前掲 *Minutes* 参照)、ランバス・吉岡協議の結論は事実上はすでに以前から承認されたも同然なものとなされたと推察される。

1892年7月の年会総会で関西学院憲法案が可決された。ここにおいて関西学院・Kwansei Gakuinの名称は最終的に創設機関である日本宣教部によって正式に承認されたこととなる。

II 「関」「西」「関西」の音声

1. 「関」の中国語・英語・日本語音

現代における「関」の中国音とはどのようなものか、またそれが英語や日

本語の音声体系のなかへ受け入れられた場合、どのような変化をこうむっているかを考察する。

中国語における「関」の音声

『学研 新漢和大事典』よれば、「関」の現代音は kuan である。他方現代中国語標準音を示す音声記号ピンイン（拼音）では guan とされる。

前掲「大字典」k は無声（声帯が振動しない）・無気（氣息音の出ない）の軟口蓋閉鎖（軟口蓋で流息を閉鎖する）音であり、それと区別される無声・有気（氣息音の出る）の k は k' と表記される。そしてピンイン g は無声・無気の、ピンイン k は無声・無気の軟口蓋閉鎖音とされるのであって、この場合において両音声記号は使用される記号においては異なるものの発音自体は同一となる。すなわち「大字典」／k／＝ ピンイン／g／、大字典／k'／＝ ピンイン／k／となる。（軟口蓋は上あごの後半部分）

ところでここで問われているのは有気か無気かだけであって、有声か無声かについては問題とされていないことが分かる。

中国語には濁音は存在しないということが前提にされているためであるが、いかに k を無気音化してもピンイン g の音声には到らない。後者からは濁音の響き（声帯の振動）を消し去ることはできないように思われる。われわれが k の無気化ということにこだわって発音しているとそれは中国人には有気の k と取り違えて受け取られてしまう。音韻上ではともかく、音声学的には、やはりピンイン g は無声・有気音 k' の無気化した音ではなく、無気・有声軟口蓋閉鎖音である IPA（国際音声記号）g の無声化した音声と考えなければならないし、その無声化とは完全無声化という意味ではなく、有声音（濁音）g の、有声性が低下した音と考えるべきであろう。

謝信之『中国語漢字音辞典』（2002年、いるか出版、93頁）によれば、ピンインの b, d, g は無気・無声音とされているもののその実際の音声にはある程度の弱い声（声帯振動）を伴う。これらの弱い声は有声音の b, d, g の音とは単なる程度上の違いに過ぎず、「これは聴覚上にも音声分析の機器の実験結

果にも現れて」いる。すなわちピンインの g は完全に無声化したものではなく、有声音 g の有声性の低下—ある程度の無声化—した音声に留まるということになる。要するにピンイン guan で示される音声からは、弱まっているとはいえ濁音の響きを消し去ることはできないのである。

謝のいうにはこのことは聴覚上でも実験結果においても確認できるのであるから、「関」の中国音としては《有声音 g の有声性の低下した音としての g》に始まる guan とするのが妥当である。それは無声・無気音とされる k を使った kuan とは質的に異なる音である。謝はピンイン g 音を IPA 補助記号を使って \dot{g} と表記している。

なお、この小さい白丸は「無声化 (devoicing) を表す IPA の公式の補助記号」とされている (『国際音声記号ガイドブック』252頁)。辞書によると音声学では unvoice, devoice は同義であり、「普通の有声の話し言葉から発音の際にその振動の総体からその一部あるいは全部を取り去ること」を意味する (“The Random House College Dictionary” revised edition, 1981. の unvoice の項)。したがって IPA の補助記号・白丸を部分的なものを含めての無声化という意味で使用する謝の用法は、IPA の規定の範囲内にあるものということができる。

英語における「関」の音声

ケンブリッジ大学教授ウェード (Thomas F. Wade, 1818–1895年) がその弟子ジャイルズ (Herbert A. Giles, 1845–1935年) の協力を得て集大成した『中英辞書』は1892年に上海で、1912年にロンドンで刊行された。同書はウェード・ジャイルズ式の、中国語の英語アルファベット表記法を内容とするものであった。英語世界において中国語固有名詞の表記に広く利用されたという (『広辞苑』および『ウィキペディア』の「ウェード-ジャイルズ式」の項参照)。

インターネット上の Wade-Giles Spelling System によれば、「関」のピンイン guan (IPAの \dot{g} uan) に相当するものは kuan (この k は無気音の k) として示されている。前掲の『新漢和大辞典』が使用するアルファベット表記法はこの点ではウェード式を踏襲したものであった。

ところで推察するところでは、中国語を知悉していたウェードらは当初 kuan と表記して \dot{g} uan と読ませようとした。すなわち /k/ は音素であり、[\dot{g}] はそれに対応する音声と考えた結果と思われる。しかし両者を実際の音

声の場において考えるとすれば、先に考察したように両者は異なった音声である。

一般の英語母語話者にとっては、ピンインの g、IPA の g に当たる音はきわめて同定しがたく、かつ発音にくいものである。彼らは当然にウェードらが提示した無気音 kuan としてではなく、対極にある有気音の kuan と発声することになった。

時がたつにつれてさらに変化が見られる。無気・有気を問わず kuan という文字も音声も英語では本来使われなかったものであり、文字で kuan としているものはほぼ外来の固有名詞である。一般の英語母語話者はそれを自らの言語に受け入れるために、kuan を IPA の $[\text{kwan}]$ と発音するようになり、綴りも kwan とされる場合が多くなっていった。

kuan は 氣息とともにk音を起こしたあと、円唇の態勢で u 音を、続いて口を開いて音節anを口外へと放出する。かなり強い音である。kwan は、氣息とともに k 音を起こしたあと、ほぼ同時に円唇で軟口蓋の w 音が起こる。軟口蓋音に同じ軟口蓋音が連続するのであるから音素配列論の観点から見れば、kwan は kuan にくらべてより英語らしい音連鎖である。

その結果、1 音節 kwan は $\text{g}uan$ を素とする 2 音節 kuan よりも経済原理に叶った滑らかな音となる。英語母語話者にとっては kwan・ $[\text{kwan}]$ の方がなじみやすかったといえよう。

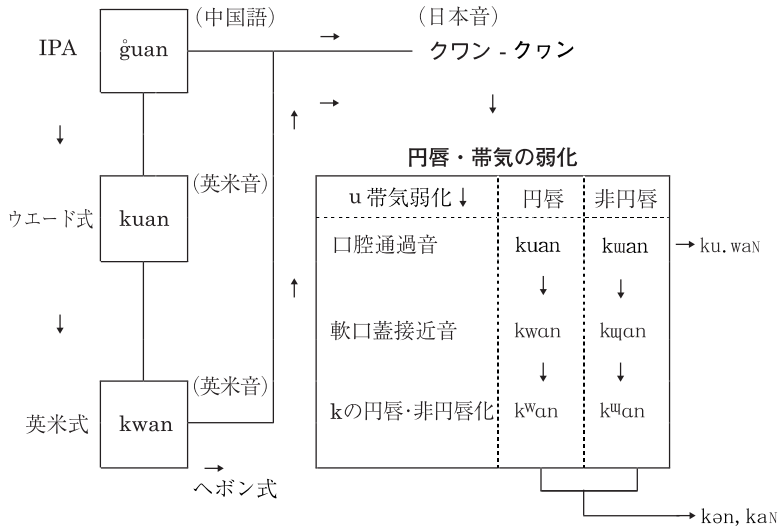
日本語における「関」の音声

本項の本論に入る前に第 1 図の構図を見ておきたい。

i) 「関」の音声 先に説明したように中国語漢字「関」は、英語界ではウェード・ジャイル式の表記法で kuan (IPAでは $\text{g}uan$) と表記された。ところが後に至って kuan の表記のもとで kwan と発音され、さらに後には英字アルファベットで kwan と表記されるようになった。第 1 図の左の列はその過程を示している。

他方、この中国語漢字「関」の音声は日本にも直接に浸透し、その音はク

第1図 クワン音の諸相とそれらの関係



注記/ɰ/は非円唇高舌後方母音、/ɰ/は軟口蓋接近音(子音)
 なお k^uan のように ɰ を補助記号に使用するのは公認されているわけではないが、表における kuan の展開から見てこのような発音もありえると考えられるので、表中に位置づけることにした。
 ク、ワ、ン ku, wa, N とカン ka, n, kə, N とは拗音ではありえず、クワンの領域外。

ワン(クワン)とカナ表記されるようになったが、一口にクワンといっても右側の二列に示されるような多様な展開を示すことになる。そしてこのクワンはヘボン式カナ・英語アルファベット表記法では kwan として示される。

クワンの発音は日本において中国語音、英語音を素にしながらもしだいに日本人が発音しやすいようなものに変容していく。国際的言語環境のもとでの日本的なクワンの醸成となる。関西学院の「関」に特定していうと、創設者ランバス提唱の Kwansei Gakuin の発音が日本の言語環境にあってどのように転化していったかを考えてみたい。

英語母語話者と同じように、日本語母語話者にとっても中国語母語話者の音声はきわめて聞きにくくまた発音しにくいものであったので、冒頭の g は

k^h (右肩上の h は有気音を表す) に変えて受け入れられた。そしてクワンというカナが採用されていたが、クワンといってもその実際の音声は多様に存在する。そこで IPA を用いてクワン仲間と考えられる 6 音声を定立し、それらの特徴を示したうえで、それらの関係と発展方向を推定してみる。

第 1 図のうちの「円唇・帯気の弱化」部分にもとづいて考察する。まず円唇列を取り上げてみよう。円唇音は日本人には不慣れな音である。中国から「關 (関)」字がその音とともに移入されてきたとき、日本ではつとめて原音に沿うように試みられたであろう。しかしその円唇音は容易に習得できるものではなかった。そして反対にしだいに日本人に発音しやすいような発音へと意識的、無意識的に作り替えられていく。言語学でいう「同化」の過程である。

この日本語 kuan 音は、中古代中国語「關」の guan-kuan 音を素とする点において、先に説明した英語 kuan 音と似通ったものと考えられるので、そのときの説明をごく簡単に反復しておく。kuan 音は k 音を円唇の態勢で発声した後 u 音を、続いて口を開いて an 音を口外へと放出する (2 音節)。

一方、kwan は、k を起こしたあと、ほぼ同時に円唇で軟口蓋接近音の w を、またほぼ同時に an を発声する。(w は子音で 1 音節) そこで口腔内でさほど妨げられることなく放出される音声から舌の奥が軟口蓋と接近することによってかなり抑制されて放出される音声に変わることによって uan は wan に転化する。kwan は kuan に比べて氣息を放出する力が弱くなり、穏和な音となる。

k^wan は子音 k 自体を円唇化して発声する。

以上は u の帯気力を弱めることによってクワン音になじませようとした無意識的な変更の結果である。

他方、kuan は kuan に対するもので、後者から円唇の構えを解いた (非円唇化した) 音である。この **u** は日本語のウにもっとも接近した音である。ちなみに五十音図に対応する「現代日本語の拍の音声記号表」(『大辞林』特別ページ、「日本語の世界 5」所収) では、ウ列 (直音、拗音とも) にこの **u** (ただしス、ツ、

ズの場合は *iɪ*) を採用している。

kɯan は *kwan* に、*kʷan* は *kʷan* に対するもので、それぞれの後者を非円唇化した音である。以上は非円唇化したクワンが *ku* の円唇と帯気力とを弱めることによって自らをクワン音になじませようとする、日本人が無意識に招いた諸変化の結果である。

総理ランバスの発音は、またおそらくは彼に同意した吉岡の発音もまた *kwan* であり、他方それに学びつつクワンと発声する日本人の学院関係者の多くの発音は、彼らがよりなじみやすい *kɯan* か *kʷan* であったように思われる。

帯気力弱化と *u・w* 音の非円唇化とを軸として *guan-kuan* の日本語化は進んでいく。なお *kʷan* と *kʷan* とはクワンの領域を出るものではないが、*kan*, *kən* との境界線に近づいたことになる。

以上は定立したモデルを使つての形式的な推論に過ぎない。クワンセイが学院関係者によってどのように発音されてきたかは、調査資料が残されていない状況では各人の記憶に頼るほかない。筆者のささやかな記憶では図に挙げた6つのモデルが実在したように思う。

筆者の上記の推論は、クワン音の種類は複数存在しているが、それらの関係の差異と変化とを測定する尺度を示すことが関西学院の「クワン－*kwan*」という特定の対象を把握する上でとりわけ有用であるとの判断にもとづくものである。

ii) 「西」の音声 関西のセイについてはそれがカンと同様に日本漢字の漢音読みであることはすでに触れているところである。通常の話し言葉では、2モーラ2音節の *sei* としてそれを一字一句ゆっくりとていねいに語るのではなくて、*sei* (しばしば [*see*]) と1音節2モーラで発話されており、この区別を認識しておくことが以下の展開にとって肝要である。

3. 音声「関西」－*Kwansei*の魅力

ランバスと吉岡がクワンセイにこだわったのは、それが意味するところだ

けでなくさらにまたその音声の美しさに惹かれたからだと思われる。関西学院創立より60年後の話であるが、1949年に Edmund Blunden 作詞、山田耕筰作曲の校歌が A Song for Kwansei と題されて発表された。その解説に当たった半田一吉は、高名なイギリスの詩人ブランデンは「校歌のたぐいはめったに作られないが、開学周辺の自然環境の美しさがたいへん気にいられたようだ」と記し、さらに「Gakuin という音は詩に向かないが、Kwansei の音は音楽的でよいといわれたと聞いている」と作詞に積極的になった動機を推測している。

英米人の耳には 4 モーラ 2 音節の構造をもつ Kwansei という音はたいへん心地のよいものだったようである。他方字音である Gakuin は、そのまま音声として読めば、Gaku.in の 3 音節となり、前二者は軽音節、最後のものは重音節となって快適な律動は感じられない。結局、彼は題名においても歌詞においても学校名は Kwansei だけで通し、Gakuin の方は完全に無視してしまった。(後にみるように音声として gak.in であればこちらも 4 モーラ 2 音節フットとなり kwansei gakuin 総体の律動が生まれる。)

かえりみれば総理ランバスが Kansai でも Kansei でもなく Kwansei にこだわった理由は、kwan の詩的な響きと kwan.sei の快適な律動とが相まって彼の心を強く捉えていたからであろう。

吉岡にしても同様の受け止め方であったといえる。校歌 Old Kwanseiは、プリンストン大学のカレッジソング 'Old Nassau' の歌詞を関西学院の校歌になるように換えてその曲にあてたものである。1900年にはじめて歌われた Old Kwansei, Kwansei Gakuin の言葉が巧みにこの美しいメロディに溶けこんでいる。半田はこの日本語の作詞を吉岡の手になるものと推定している。'Kwansei' という言葉にたいする吉岡の思いには、ランバスに劣らず深いものがあったといえよう。

関西学院キリスト教主義教育研究室『関西学院の歌—関西学院校歌・応援歌・学生歌資料—』 第1集、1981年、所載の半田一吉の解説より引用。

Ⅲ 音声としての「関西学院」

1. Kwansei Gakuin と Kwan-sei-gako-in

先に見たように新しい校名を正式決定するには、創設者である M.E.C.S. 日本宣教部の年会において承認されることが必要であった。総理ランバスはあらかじめ吉岡と協議のうえ作成した学校名を関西学院、その英字表記を the Kwansei Gakuin とする案を日本宣教部年会の組織委員に提示した。

1889年年会および1892年年会における関西学院憲法起草委員会の記録や M.E.C.S. 本部への報告などをみると、関西学院とすることへの異論は示されなかったように感じられるが、その英字アルファベット表記については二とおりの見解が表れている。その一つは the Kwansei Gakuin、いま一つは the Kwan-sei-gako-in に収斂していく一連の表記すなわち the Kwansei Gakko In (1989年7月15日の宣教部通常会議についての記事。前掲 *Minutes*, p.25, 資料編 I, p.639.)、次いで the Kwan-Sei-gako-in (同月16日の関西学院憲法草案起草3人委員会の委員選考会議についての記録。 *Records of the Japan Mission, Methodist Episcopal Church, South. From Oct.1st, 1886 to Sept.1st, 1889*, (父ランバス自筆の記録) p.56. 資料編 I, p.623.)、そして the Kwan-sei-gako-in (同月18日の憲法草案審議についての記録。先掲 *Records*, p.56. 資料編 I, p.622. および翌19日審議の記録。資料編 I, p.621.) であった。

通史編 I、p.100では資料編 I と異なって Kwansei Gakko In にあたる言葉が Kwansei Gakkou In と表記されている。これは上掲の *Minutes* に照らしても明らかに誤転記である。父ランバスが何を求めてこれら一連の表記をたどったかを正しく理解することが肝要である。この点については後述する。

それらを見ると、前掲2者協議の結果を容れて名称を関西学院とすること、その英字表記を「関西」のところは Kwansei にすることについては、すでに共通の理解が成立していたと考えられる。ところが〔学院〕の方の表記については、上掲の異なった2系列が見られることになった。

総理ランバスは Kwansei Gakuin という表記で一貫している。アトレー

(N.W.Utley) も1889年年会での自らの報告をまとめて署名した文書においては the Kwansei Gakuin と記している。(Minutes, pp21-22、資料編 pp.625-626.)

一方、Gakko In の記入のある報告書に署名しているのは父ランバスであり、別の報告書に出てくる同一系列の表記は無署名であるが、それらは後に触れるように同一志向にもとづく試みの模索であると考えられること、また日本宣教部書記 (SecretaryまたはActing Secretary) として諸会議報告書作成を担当したことから、この系列表記のすべては父ランバスによるものと推定される。

総理ランバスらが Kwansei Gakuin の表記を選んだのは、ヘボン式アルファベット表記法に学んだからであろう。ヘボンは「関」に kuwan (『和英語林集成』初版、1867年)、k'wan (第2版、1872年) の表記を与えた (子音に付したアポストロフィーはそれが放音であることを示す) のち、ようやく1886年の第3版の kwan で決着をつけた (飛田良文、李漢燮編『ヘボン著和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』第1巻、2000年)。それはランバスらが関西学院のアルファベット表記を求めた1889年の3年前のことである。

ヘボン式はカナをアルファベットで表記する有力な方式として使われるほどに日本で影響力を増していたのであって、第3版は時間的に見ても十分に利用可能となっていた。またヘボンは宗派が違うとはいえプロテスタントに属する信者であり、医療を媒体として伝道活動に従事していた。医者であり宣教師でもある総理ランバスは彼に強い関心をもっていたはずである。

他方父ランバスが gakuin という発音表記に不満を感じたのは、その通り発音すればとりわけ k に続く u が英語の緊張母音 u のように口のすばめ方も息の出し方も強すぎて、日本語としては奇妙に響くからである。日本語のウは口をすばめず、ある一定の条件のもとでは無声化される場合があり、強いて英語の緊張母音の感覚で u と発音すれば日本人の耳には大変不自然に感じられる。日本人がクワンセイガクインという場合の gakuin の u は前の ga にアクセントがくる場合先行音の k により無声化され、gak.in に近いような音で発音される。そこで父ランバスは強い違和感を与えないような、い

っそう適正な表記を真剣に追求した。gakko in, gako in などはその一連の試みの足跡なのである。

父ランバスがカナの字音アルファベット表記であるヘボン式表記が実際のあらゆる場合の音声を必ずしも正確には示してくれないことへの不満を強く感じて正しい音声的表記を模索したのは、有意義なことであり、継承すべき意義をもっている。

2. 音声としての「関西学院」

「関西」、「学院」それぞれの由来と音声について検討したので、続いてそれらをまとめた「関西学院」の音声の検討に進む。関西学院の公式英字表記は Kwansei Gakuin であるが、ここでは IPA を用いて実際の音声を表示することとする。

第2図 音声としての「関西学院」

1	kwan sei gaku in	へボン式表記									
2	<table><tr><td>kwan . sei</td><td>gāk(ku) . in</td><td></td></tr><tr><td>関 西</td><td>学 院</td><td></td></tr><tr><td>kuan . sei</td><td>gāk(ku) . in</td><td></td></tr></table>	kwan . sei	gāk(ku) . in		関 西	学 院		kuan . sei	gāk(ku) . in		IPA式表記
kwan . sei	gāk(ku) . in										
関 西	学 院										
kuan . sei	gāk(ku) . in										
3	<table><tr><td></td><td>ga . k^hu . in</td><td>k^hem . po:</td></tr><tr><td></td><td>学 院</td><td>憲 法</td></tr></table>		ga . k ^h u . in	k ^h em . po:		学 院	憲 法	IPA式表記			
	ga . k ^h u . in	k ^h em . po:									
	学 院	憲 法									

注記 1は関西学院が正式に定めたヘボン式による表記

2と3は「学院」が4字複合語の前側にくる場合と後ろ側にくる場合の音声の違いを示したものの、アクセントにおいて高音となるところには上線を付した。

記号のうち、uはuの非円唇化した音、丸印がつくのは無声化した母音。

2と3の一部に波形アンダーラインを付したのは母音無声化の有無の対比を明示するため。

補助記号について ^hは有気音、:は長音、˘は短音。ピリオドは音節の切れ目を示す。

第2図に沿って説明すると、**1**の Kwansei Gakuin は、関西学院の伝統的呼称クワンセイガクインのヘボン式英字表記である。**2**はこの呼称の音素ではなく音声の IPA による表記である。**3**は4字(2文字×2)複合語における位置が異なる(ここでは「学院」の位置)ことによってその音声が変わることを示すために掲げている。

まず同じ「学院」という言葉でも、それが4字の漢字複合語(2字×2)の前方に位置づけられる場合と、後方に位置づけられる場合とでは発音が異なる。例えば「学院」憲法の場合には、複合語アクセント規則により「学院」内の第2音節 kw からが高くなり(平板)、そのためにkは有気音 k^hとなりやすい。一方、関西「学院」の場合には、ga がアクセントの核となり(頭高)、それ以降からピッチが下がる。それにともない **3**では k^{hw} となっていたものが **2**では母音 ɯ の無声化が生じて k^h は k となり、ɯ は声を失う(k^ɸ)。それは kwan.sei. gäk. in と表記することもできよう。

これは期せずして音節(syllable)をもとにした発音となっている。一字一字を丁寧に読むときには kan.sei.ga.kui.N と拍をもとにした音声となるが、上記の話し言葉での音声では(kwan-sei)(gäk-in)と2モーラからなるフットで発音され、フット(詩脚)は、拍と並んで日本語のリズム単位の一つと考えられているがゆえに、優れて詩的でリズムカルな音声の展開となる。

3. 音声にもとづくアルファベット表記では kwan.sei.gak.in

父ランバスによる Kwan-sei-gako-in という表記は先に見たように大変示唆的であった。発音が音節(syllable)ごとに区切られているが、このように音節を連ねて読むのは英語母語話者の特質である。ただ gako は2音節であるのにここでは1音節として区切られているが、これは父ランバスの苦しんだところであろう。というのは中国語に大変通じていた彼は「学」が中古音では gako でなく閉鎖音節の gäk(『新漢和大事典』の推定では fiok、fi は h の軽く有声化した音)、そして現代でも広東語では hok(千島英一編著『東方広東語辞典』2005年、東方書店)であり、ともに k で終わることを知っていたと思われる。

kwan.sei.gāk.in とすれば閉音節を基として話す英米人にはたいへん発音しやすい。しかし残念ながらかつて gāk が導入されたとき、日本語では入声韻尾 k を音節文字のカナで表すことはできないので、日本語として安定した音声となるためにはそれに母音を加えてガク gaku とせざるを得なかった。

ところで日本人の普通の話言葉では先に説明したように u 母音に無声化が生じる場合がある。「関西学院」の場合にはガクインのク (ku) にこれが妥当する。実際の発音では日本語でもこの場合は gak とするのが自然であるし、事実そのように発音されているのである。

ちなみに、中国語では語尾に子音が来る場合 (入声)、その語の発音は促音的になる。

父ランバスのいう Gakko In はこの促音を活かそうとしたものであった。

父ランバスは gaku を gako とすることで ku のもつ緊張もしくは曖昧性をいくぶん和らげようとした。たしかにそれではなお不十分であったが、「関西学院」の音声に近づく有力な手がかりを示唆する、学ぶことの多い、優れた発想であった。

以上の考察を振り返ってみれば、kwan.sei.gāk.in と重音節 (heavy syllable) を連ねて、語を作るのは、英米人にとっては自然なことである。他方、日本人にとっては円唇を意識しなければならない合拗音を含む kwan にはやや難点はあるものの、意外にも無意識の母音無声化 (gaku の u の無声化) によって、kwan.sei.gāk.in といずれも重音節を基にした発音に自然になっている。英語母語話者にとってはすべての音節が2モーラの重音節で揃っているので、リズム感を享受することができるし、日本語母語話者も話し言葉では同じリズムで語っていることになる。

また kwan を非円唇化した kuān を用いて kuān. sei. gāk. in と、さらには現代的呼称の場合には kən. sei. gāk. in とすれば、いずれも非円唇であるので日本語母語話者にとってはさらに発声しやすくなるといえよう。

以上の考察からすれば、伝統的呼称は [kuān. sei. gāk. in]、現代的呼称は [kən. sei. gāk. in] を標準とすることが日本人であるわれわれには自然な発音であるともいえよう。とはいえ関西学院設立にあたったランバス総理、彼

を助けた日本人有力者の吉岡美国が提示した /kwan. sei. gāk. in/ を音素としてその歴史的意義を理解しつつ、上記二音をその日本語に転化した音声としてそれぞれ然るべき時、場所で活用することができよう。また [k^wan]、[k^uan] も変化音としてクワンの仲間にいれることにも寛大であるべきかもしれない。

Ⅳ クワンとカン その歩み

1. 字音仮名遣いと音声

江戸時代に本居宣長らは日本漢字の音読みカナ表記法を総体的に検討し、編成した。その時期にはすでにカンはクワンに劣らない勢力をもつようになっていたが、クワンの方が採用されている。北京語の kan, kuan, gan, guan の4音が日本人の耳にはカンに似たような音としてあり、そしてそれらが各々4種の声調をもっている。これら16とおりに区分されている膨大な語の発音を日本ですべて一律にカンにしてしまうと同音異義語が大量に生まれ混乱が生じるという政策的配慮も行われたと思われる。

その後現実の音声は全体的に字音仮名遣いに示された表記とは、ますます乖離していくことになったが、敗戦後の国語改革に到るまでは漢字をカナ表記する場合には基本的には本居らの定めた字音仮名遣いに拠ることが求められた。

新たに発足させる学校の名を総理ランバスと吉岡が関西学院とし、クワンセイガクインと呼ぼうと協議した1889年のころには、字音的カナ表記としてはクワンセイは正当な表記であったし、現実の音声において当時カンのほうがクワンより優勢であったとはいえクワンセイと呼ぶもカンセイというも任意であった。先に述べたように二人は漢音「関」の古典的な発音であるクワンを選んで意識的、積極的にその発音を採用したのである。

なおここで注意しなければならないのは、吉岡らのいうクワンセイは、あくまで字音仮名遣いにもとづく字音的カナ表記のことであって表音的カナ表記のことではないとい

う時たま見受けられる主張についてである。小論「関西学院の呼称について」(本誌第16号)で紹介したように、吉岡は、「ぜひクワンセイ・ガクインと呼んでもらいたい」、「関西学院は、カンサイでなくクワンセイガクインと読んでいただきたい」と語っている。これはまさしく表音的カナ表記であることを示している。というのは、これが字音的カナ表記であるとすれば、「クワンサイでなくクワンセイガクキン」と書かなければならないからである。そして吉岡はクワンセイガクインというこの呼称を「命名当時呼ぶことにしていた定め」と強調している。

吉岡美国、前掲講演記録(「ランバス先生のことども」)、前掲誌24頁。

なお全国的にみてクワンと発音する人のほとんどの声音が *kuɒn* であったときに *kwan* と発音させようとする関西学院の方針は独自の意義をもつものであったが、最初からこの二つの発音の区別がなされず、実際には円唇の子音 *w* ではなくて非円唇の子音 *u* を用いた *kuɒn* の音声となっていたように想像される。

2. クワンからカンへの転化

全国的に見ればカンはクワンにたいしてますます優勢となり、国語学者のうちから従来の字音式カナ表記を表音式カナ表記に改めようという意見も次第に出されるようになったが、やがて国家的見地からの検討が始められるようになった。関西学院のクワンをめぐる環境は大きく変化していく。合拗音クワンを直音カンに変更させようとする政府・文部省や国語審議会などの対応の経過を、文化庁『国語施策百年史』(2005年)所載年表に沿って追ってみよう。

明治維新後では、まず帝国教育会国字改良部が1900年に表音式への改正を含む国語に関する改良意見を発表し、次いで同年に政府－文部省は小学校施行規則を改正し、字音仮名遣いの表音化などを提示し、これを国定教科書に反映させた。

「関」についていえば、これを表記する、あるいはこれに付されるカナは教科書ではクワンからカンに変更された。未来を背負って立つ小学生がこの政策によってクワンから引き離された影響はきわめて大きかったと思われる。

これらの改革にたいして歴史的仮名遣いの意義を重視する有識者の反対はなお根強くあり、文部省の考え方もふたたび変わって1908年には小学校施行規則は再改正され、国定教科書は歴史的仮名遣いに逆戻りした。

1930年代に入って改正の動きは復活した。'31年に臨時国語調査会が「仮名遣改訂案」をまとめて公表し、'39年に国語審議会が「仮名遣い改定に関する諸案集成」を、'42年に「字音仮名遣整理案」をまとめて発表したのち、'42年に表音式仮名遣いとしての「新字音仮名遣表」を議決し、文部大臣に答申するまでにいたったが、以降敗戦にいたるまではそれ以上の進展を見ることはなかった。

これらの構想は戦後の国語改革の内容の基本を明確に予示するものであった。これまで見え隠れしていた「クワンセイガクイン」反対、「カンセイガクイン」支持の考えは、これらの全国的な動向に強く刺激されていたようである。

敗戦後に戦後改革の一環として国語改革が行われた。1946年11月に国語審議会の答申にもとづいて「当用漢字表」、「現代かなづかい」についての内閣告示・内閣訓令がだされ、「関」のカナでの正書法はクワンからカンに変更された。

これは字音仮名遣いの改正であり、この措置によってクワンという音声禁止されたわけではないが、内閣告示・訓令に従う学校教育、放送、新聞、雑誌などマス・コミュニケーションの攻勢によって音声上においてもクワンの占める場所は極度に狭められることになった。「クワンセイガクイン」がカナ表記でも音声でも「カンセイガクイン」に道を譲る大きな転機になったと考えられる。

この事態に関西学院が歴史的呼称と現代的呼称との関係についてどのように議論し、決めたかは目下のところ不明である。

3. 二つの呼称とそれらの関係に然るべき位置づけを！

クワンというカナ表記が戦後国語改革では正書法としては認められなくな

り、それに伴ってクワンの発音をカンに変更する言語政策が学校やメディアの営みによって学生や視聴者に対していっそう日常的に間断なく執拗に行われ、その結果カンがクワンを圧倒してしまっているという状況下では、現代的可な表記としてだけでなく、現代の呼称としてもカンセイガクイン、kən. sei. gāk. inとすることもやむをえないことであつたのかもしれない。

しかしながら関西学院の一員としての同一性 (identity, 自覚) を再認するようなとき、たとえば入学式、卒業式、創立記念日などにはすくなくとも関西学院やその関係団体を代表するような人びとの式典などでの挨拶では、創設者たちの英知と決断に敬意を表し、また関西学院という名称がもつ豊かな国際性と歴史性を再確認するために、kwan. sei. gāk. in と、あるいはその w を非円唇化した、日本人の音声構造にいっそう適合した kuɰan. sei. gāk. in と話すべきであると考える。

学院史研究においてクワンセイガクインという伝統的呼称が正当に位置づけられることなく抹消されていること、それと関連して伝統的呼称と現代の呼称との関係がなんら顧みられていないことはまことに残念なことである。クワンセイガクインか、それともカンセイガクインか、という一元的思考に陥ることなく、伝統的呼称と現代の呼称のそれぞれを、そして両者の関わりを関西学院史において、また現代の学院生活において、しかるべく位置づけることこそが肝要なのである。

「関西学院」という言葉が内に蔵している《意味と音声》の歩みをしっかりと心にとどめておくことが、学院に関わる者の自覚を高めることになると確信する。この小論がそのいとぐちになれば幸いである。

なお最後に一言しておきたいのは、現代の呼称カンセイガクインの音声についてである。カンセイを kan. sei とカンにアクセントを置いて発音するのは伝統を尊重する点においても、また音声的な美しさを保つ点においても好ましくない。セイにアクセントを移して kən sei. gāk. in と発音するのが好ましいと考える。

伝統的呼称抹消問題については、池田信「関西学院の呼称について」(『関西学院史

紀要』第16号、2010年3月25日）をご参照ください。この論文は関西学院大学リポジトリに収録されています。

付記

本稿「関西学院の命名とその音声」は、前々稿「関西学院の呼称について」[本誌第16号（2010年3月）所載]、前稿『「関西学院の呼称について」への補遺』[本誌第17号（2011年3月）所載]に次ぐものである。これらの稿と本稿とでは論述がかなり異なっている個所がいくつかあるが、その場合には本稿のほうが現在私がいっそう適正と考えているものである。

前稿の正誤表

①249頁「その類似点の第1は、」に始まるパラグラフの第3行目にある「上平」は、ここでの文脈では不適合な用語なので、この行と次の行との2行を以下のように書き換える。

他方、中古音の kuān と sei はともに平声（ピッチが平らな音声）である。のちの時期に平声は陰平声（第1声）と陽平声（第2声）に分かれるが、平声で k, s など清音に始まった語は同じ声調のままに第1声とされたと推測されている（表15「声調体系の変遷」『学研 新漢和大事典』2137頁）。そうだとすれば中古音の kuān と sei とは漢語現代標準語の声調でいえばともに第1声（高くて平らな調子）に当たるといえよう。

②250頁の「第三は、」に始まる行の第1行目にある“ ”のなかに入るべき記号が欠けている。ここに入るのは、短音を示す補助記号の ` である。

大高博美先生には、本稿閲読をご快諾の上、特に音声学的記述について多くのご教示を賜りました。また学院史編纂室の皆様からは多大なご協力を得ました。とりわけ池田裕子氏には資料閲覧の便だけでなく、広く学院史にかかわる諸事項についての知識をいただきました。

心から感謝致します。